復讎十三七月

上

208
3
692

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

208
3
692

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

神屋蓬洲先生求
不許翻刻
千里必究

蓬洲

文化五年歲在著雍執徐
春王正月上弦之日新鐫

小萬紅叙

小萬紅者、蓋因來當矣、天下童
雅、雲亦不昭和之也、
不知其德有不可湮
沒者、而天使人言之

是編初名小萬紅後更今名
三七月序及題言從初名矣

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692
ガラス使用

邪、問者在人蓮洲、
就其歌曲、若小蔓紅、
紅者色之美者也、詩
之知者、取其之美
也、金編若干、具演
小歌之意、而整之小

萬者、亦童稚之所唱
知而識也、蓋周所
之識、而知之小萬者、
知者小萬者、而知之
孝子節婦、賊帥惡
根、知者孝子節婦賊

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692
ガラス使用

帥恐懼、而知為積善
積惡、天報之不爽也、
予行遠自邇、登高
自卑之意也、原雖屬
寓言、其於勸懲之
旨、予而詔功名教焉、

如言截趾適履、則
不知所以為斯編
也矣、

于时
文化四年歲在彊梧
單閼仲春書本岡

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692
ガラス使用

烏號街碧梧書屋

羅月山人

聖門

小萬紅題言

此編擬譯手鞠唄之書古實今物語而所著也原以烏有之事爲小歌之註脚土地人物固無有的指也惟據句中太郎次郎之名而假横山

国立国会図書館　復雛十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

氏係之應永中之事矣
如其謂鳥方晴姫高連
高景亦假設之名也蓋
題曰小萬紅實句中所
載之名此編之所搆思
也固是一箇耳譬之言
全要勸懲猶佛之種種

因緣種種譬諭廣演言
教之意矣讀者無笑且
唾則可也

于時
文化四年丁卯春三月
神屋蓬洲

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

凡例

一此書タヾ童蒙ノ観覧ニ便ニス故ニ文中言語等ノゴトキ時代ト相ワタラザル者有只其意味ヲ要トス

一画クトコロノ人物ノ如キ亦一ニ方今ノ俗ニシタガフ其餘器械ノゴトキモ亦然リ只童蒙ノ観ヤスカランガ為ニ設クルノミ

一用ユルトコロノ字ノゴトキ雅俗相混ズ且字傍音声ノ假名等ハ四声ヲ別ツヲ暇アラズ只呼トコロニ依テ記ス必ズ齟齬スル者多カラン観者諸ヲ恕セヨ

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

小萬

忠肝義膽
英名不朽

鳴之方

姿美心貞如死
無他

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692
ガラス使用

赤色赤光理不尽
仏法善悪報応図絵

復讎十三七月上之巻

蓬洲著

第一場

お月さまいくつ十三七つまだ歳は若いなあ彼の子を
産でこの子さうんでおまんは懐ろ志よおまん
何處へ行く油買に茶代くひたいなあ屋のえんて
氷がそびつくすべつてこと祝んぐのぶろ一ろ外こぼし其油

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

どうして太郎殿の大と次郎殿れば大とこんなる
覚えるまつて其大さどうして大敵小もつく
どんくらちくと下略
往古より斯嬰児の喫つる其意をかんず教に
癒永の頃小や有久鎌倉の管領満兼れ幕下小
瀧山左門藤原直道の一子同要之介道正といふ
人ありて幼稚より英文長とある小及んで よく文武
二道小達し純中射芸に通ず直道孔て愛を

いとり北岩土小孝を盡し愛敬奉養又ろく教
事あり配君八鳥の方と申して古今に比類なき美人
ありて蟋首蛾眉寵好といへども女性眉八三日月代
画くごとく常に深閨れ裏に住ば遍近ほの見る
人の氏君代さ〜ても唯三日月といひるふ八せりとて
二十ときこえる本文の婚先小月まんくつ十三ちといへ
さまど二十とんかど十三七ちと小ふ
うるひあふつ毛ふ父のそこび毛ふ八
もろ小生ど最若やうて更に親らく八見えもど

其上武に長じ管弦をよくし巻のひとくさありか
もとより正固不動れ負烈あり[illegible]晴姫を
幼ありして嬪婦る容色亦復母ぎ[illegible]れごとく
生育ぬべきおもむきなれば寵こと[illegible]
おまんといる乳人ふかづけて朝夕の花と愛つ
つ男子の鳴の方ハひ子を孕[illegible]へ
[illegible]ば[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]に増り
[illegible]ば[illegible]ハ[illegible]時に管領[illegible]兼公

霍ゞ巴の邊にく戰の調練なるべう為小鷲狩を
思ひ立[illegible]ましく已ゝ其日といへるに供奉の面く
おもひくの狩装束嵩を尽しく到着ー大鷲小
鷲大くの鳥小合せくりくを道正も弓矢
をもちく同じく御前に侍りける折しも旅鷹の行
を乱して雲井遥にクけりクるを鍾倉殿御らんじく
やよ道正ののりゞ何にくも一羽射とめんハ
ふとのゝへバらしとゞりさむらふ真先のを仕り候ハんと

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692
ガラス使用

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

よゝ。ひゝくへと放つ矢のやまこゝ丁ゞみの名ゞ中を射ぬきく御前にどうと落くまゞら匂くどの茂始としく並居る御供の八々道正を誉る声ゝゞ八鳴も止ざりけりさきゞ御感の余り當坐の恩賞と御差領不動国行の名剣我こまりしゞ道正平伏しく拝領も此時日已に西山に落きゞくみ陣をくりのげやがくゝぬくらどの八御帰館あり頃しも久の半なきゞ朔風吹く雪を荷ひ凍雲凝ゝつゝ月を

乗後ゝ唯面くの窟所へとろゝ松明のゝきゝめき渡るゝゞかゝゝぬゝゝ山れ星月夜とこゝ無く思ハ免道正も従者をまと免くく家路に趣き雪れ下をたゞ君小杉の導水にさゝゝゝきゞ不思儀や小高き杉枝のたゞゝより矢ゝきゝゝて馬上ゝゝ道正ゞむる校代射ゝりきゞ何ゝハゝゝてゝまるべきさゝもの道正馬と共ゝたゞきゞもくゞゝと落ゝ前後ゝゝきゝゝ諸士ゝハやと驚く折こゝゝの色同ド杉ゞ枝ゝよゞゝの奴え仲

吹くこゑ八方八面より大浪の涌ごとく多くの
曲者甲冑に身をよろひ矢さき優ひらめき抜きつれ
切て掛る八従者も大小周章ゆさめき主人を詰をて
力あくどるものもとりつめ彼方此方に散らんを
中小男きつかせてくくものハくせもの共の太力風に
なびき立ら或ハ手足を切られ或ハ頭ゆ刎られ
一人として生てくるハなくざり分くを味ものどもれ
髯頭と覺しきが道正の倒るを助けて立より

一刀にうべをきり死骸の腰小帯さる不動国行の太刀ゆ
奪ふと見えしが其まゝ當ゆなつ巻くゞゆ地へうゑ
失なんなのとハ人の音ゝえく松風ざり巻のこり分れ

第二場

春花一ゝび開きて世上歡樂を究る日の色ハ秋葉
盡く落て ひとり無常感ずる時なり盛衰浮沈
都てうくのごとく更小定境なることなし茲に相別

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692
ガラス使用

松葉ヶ谷のうしほとりに女主れ住居龍山道正が
母や妻ゝ女ゝどのよりおんんとあさまつりて獻仕
ゝぶぬる其ないぶくりに所か引うつりて覽東ゐく
も賤れ業つゝに目ゐきーもの〻ゝ忘きぶくこれ
晴姫とうきぶ中ゐる樂しこと乳入のおまんゐゐとに
ゐけくきすーいなまゆ笑ゆもいくぶゐくこく唯
父君れまーまさぶとむゆゐさぶ女時もゐー鳥のうこ
胎内小六月の児を身ご女きぶ人とうゐ女もの思小

行く末れ事まて〻ぶろにうゐくんうゐーて産落さん
そうぶいうゐく育てこのぐへき中くにうゐ教身とゐぶぶゐ
とくより黙髪も切アもうゐ姿とうて獻れのりうも
ゐぶゐんものをゐどいとりごちてうちうちちゐぶ〻も
又舊女君のんくゐぶきく苦ーこうゐんゐ不孝
小やと何ぶゐとりさやーてゐぶぐさめんと心をうもも
いとうゐー母君れゐも葉とそゐ佛前に香花を備へ
父子の位牌小面向をー名代當家にうゐ天竺佛れ

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

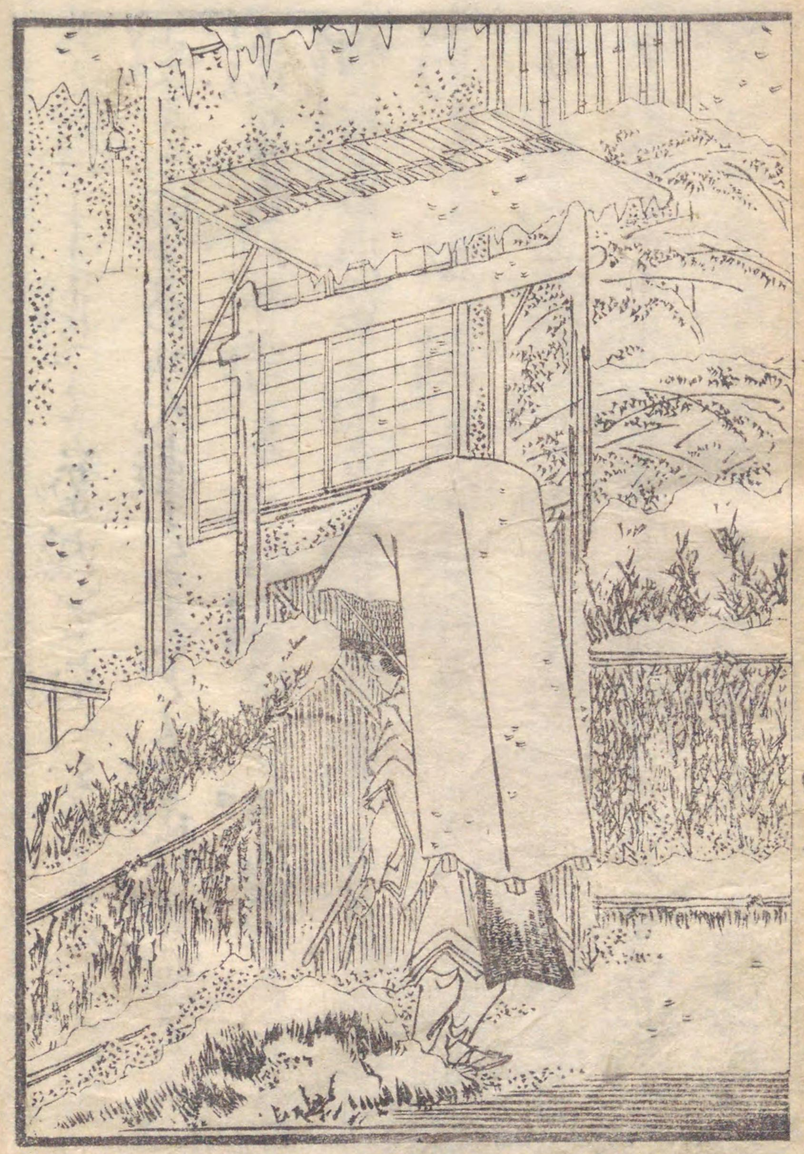
ガラス使用

観世音ハ道正りゆく晴姫の守ア本尊にと云置きバ
肌身を放さゞもさせ置ぬる此子の行末を願ひつけて
ひとへに大悲のおんちかひに御大力のゆく末願のかなふも
速に影うまに何と我が本望をとげさせ給へと一心不亂に
念じ給ひぬるとき鳥のうたふを聞て心のまりにやん氣を
紛ぶらんとおんみずからに琴弾さ給ふやと
申せバ母君もうち笑ひ貴ひ琴ハ道正も殊に好きて
ゐるせ〻ぐ今ハさんこひ〻ら心けとゝゐるべきバとくひきく

よとすゝむるに我さたのゝバ家ハ端近く吹入る風さへも
寒々きバ心ぐくなやみこへいるせうまくと母君のてゝ
ときバ晴姫もおまんも共に障子引立て八ア小々敷
折ーも雪のふりきるりていとゞこゝろ細き外ゞきて
服音れ去免やうゐるハざるとゞかなハをかきとえもなき
うき事れゐ代ゆりつゝ軒さびくむらし残る梅
琴の音ハさらーゝふる雪とおく雪をふくまけきる教
徜徉行者一人去代ま戸のこゝゐ行ぞ去ゆしき琴れ

音や雪もながめも一入と心もすみて行く杖にながれ
きこえなき其一ふしうつゝの闇に見る花のおぼろ
くと見もわかぬ明て散なん暮てちりなん散きバぜ
花の色も香もかつきえなき春は風循行者こそは
うたそゝまことや絲竹はたぐひ五音四声に通ずと
斯く志ほしき風音に殺伐の氣をかよハせしかや
女なかりも望まれるかくもこ家なかりしとさし覗き
是ハ旅の志ゆ行者のなきくもく候が一夜のお宿は

かん借し候へと案内をこへばおかまん立出で
安きほどのかん事なれども是ハ女ばかりなれ
處なれバお宿ハ叶ひ候ハじといふに循行者きくより
循行者ハいや是ハ菜門にて候へばさのみ若き
候まじ是ハ志る人の回向なくもおハしまさば
いとゝなんじろにおひまつるべし ひとへに一夜と
云ひつゝ老母きゝてさ候ハゞ父子の追善
をもなさまんとお宿まいらせうよし 云ひければ



国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

えらうばれ免と鞋代とくくべりて礼義を述べ
免角にて四方山の雑話小おびうち寛し
其折しも杖折戸れ外のうちにぞくより来
きたるともなく三十人ばかりれ強盗潜なくば
引提つて氏家の内をさしの書き静をうつて
ひろくしいるにものちりなんいとぶり内ふる
循行者のうくく叔おん躰ちの様態を窺ひ
さぐるにいらさる由ゆる人のあきれたるとこあら

見帳して廊へぶぐきのおん方おんおん名代も
きうなほしとゆりなきばあ母をやとよ
是ハ氏も名も無きものあてさしふと訪ね
循行者代も部て紙紙草紙などにも
多くくあるうんし出るハ皆敵を翠する
人々のゆりさるなり もしされ事にくも
おん入度ハぐ我竹等も雲水の諸国を遍歴する
身なきばそのぐうよきうよりともるべき

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

とゝも離れんずきバ色まぐ歩んくり離へと申さも
あんごろにゝぐあるさ比ぶ女のさよりずくるく
渡アさに船ゆ乞ふ船あきバ唯乗へと安きふゝひ
ゆゝ申さまぐ切あるおん詞葉ふゆゝりきバ諾るも
あゝぐのゝあゝぐゝゆゝまゝ歩んゆきふ入医へし
こゝぐゝハ瀧山左門直道と申もの妻ふが
直道ハ去ぬる頃鎌倉の管領氏満ゑ対
おん辱ふ戦死し子道正世を継ぎ同じく

管領今のゝ公くゝどのふ仕へ奉りしゞこのゝ為
霍が巡ふ御鷹野の折ゝくゝりも果て道正ハ
雪れ下げゆとふあゝ樹の並木にさゝくゝるきてく
家路におもむく其ゝこゝぐり例者とも多く大勢ふ
とり囲まき不意をうゝきく道正ハゝゝりの光
氏期ゆとげ剣鎌倉殿より賜ハし不動国行
の名剣を大集ひとゝきる氏朝等十餘人まぐ
詞きく離がゝくゝふ其ゝくき氏ハ瀧とさゝく

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692
ガラス使用

知るるにもかゝるべりのうへ道正ハ男子ゐ公を者
めとさえ立ぐゝ官錄成召まるさま
ゝ新民部小輔成落しを心にもゐき日成牧くり
詩へど今にゝ犯のかりう成も知るべくゝ尺俤羅道
の街小ハ道正ゞ耕慣休べき ゐく特朝ゆりし
怠れうちにゐ我等ゞいくせのあもひ衣と
おゞゝゐかゝバ一篇れ回向成もゐ成ひゐ成
さるべき新ゝゐもおりまきバ風のいてゐも

却ん知ゝせ下さゐよと始終成包まで物がゐを者
偏行者ハ眉を去ハ免めハ者の事成ゆくものゐ
さるゐてもゐぞゐ大望ゆる人々れ人陰も見勞
避地小住ゝこと小女性ぞゐゐて本望遂人者
おゞゐゐ後楠とゐるべき人をゐゐてこれく
よゐべきゐさゐの人ハおやと尋ぬきバやとよ
ゐとより近ゝき親族とゐもたべゝも唯道正と
共小ゐゐゐどの小仕ゝ小牧主膳重包と云へゐ者

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692
ガラス使用

是ある嫁女の兄なりしが一子重光といふ小比女兒にて
元号してたぐりし小鎌倉の逆臣荒川武虎が讒言に
よつて小牧父子は追放せらる其後武蔵に行て
僑居すと雖ども武虎が姦計止て鎌倉
より詐手に成けりとしかばうこに成も落て今は
行ゆくさきぞ成るたぐりぬさきばかりの人々でも
なぐさらくいづくにもおもふくべき心なてはなしがた
ほど嫁女がめやらく小唯あるぬ身の六月とも

雖ども成へば満る月に安々と生落ーて後いづくも
ともたらぬ人と暫く此所小仮僑居して成とよ
斯くうきことの重なるまぐつきあーさすがに
まち得ぬ惜しらぬ命をなぐらふ老が身あて
罪業れふきほどさえよに小知らぬ人の見報
目もいとたぐうう成ひ奴とふぐ先ぐらい言
と夫と雖ども偏行者は打うるつきさゆらぐ
今にも其歓に迴るゆはせ名釵をもさぷそくくー

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692
ガラス使用

得さるべし。唯某と後楯ふもあるべと云伐ひ
皆く響きうハ敵て志ろし免さまて事にくし
度ゞと聞き耳えるまバ循行者答へて必知ぬる
こゝもとの人ゝをど察するところ彼の松原ゆゑ名釵を
奪ハきしハ頃鎌倉小俳徊烏と小賊の仕業と
こ其心得ぬ。さまバ在々所々盗賊の首領ち教
ものゆゑ流し名釵の詮義及び日を暦ずして
敵をとゞめ出さん事我が方すのうちにあり斯く云

其ゝ者武蔵の国横山郡司平高平重が嫡子
同大膳高連なり。さゞ免ゝ耳にもきゝハん
我が當国頃東海東山両道の賊首として普く
威伐海内小揮へり。さまバ日伐迴らさゞるゝ彼れ
名釵をくし得させんうハ小ハとゝまるとも又望ゆ
まとハそまゞ風と見ちる嫁君の顔よき伐
見其免さくより昼夜愁々の情にゝえゞ闇
手下の賊徒として時唱小ゆうむまバよゝ

人の後室とうけたまわる主なき女ごさんたのき直さま
大集ひとりて妻ふせんと思ひしが斯くハ情れ
道ふ背き国中も心よろしとひとり徘徊行者了
所とやつし心来たりてやつれ成けば衣うづ
おくのごとくにさよりあれおん身ちれ成行
なきバ今より聟ぞ〻と約束ス本望成
遂せ一条人と思ふ為ひ招いざともらけし
さんの愁慕に嫁舊女顔見ひるるぞうなり

鳥のごとハきぞ〻て〻さて〻ハ汝つるぎ〻横山大膳
高連と中〻人ゐてゆりしよ汝元来鎌倉小仕官
ゐりしが其所狼藉ゐるゆへ〻君の御勘氣
を蒙ぞ其のち足柄山小柳竜ぞて盗賊共
首領とゐり徒党を企て殺戒結び往還
旅人を悩ま〻官物所掠めとり民間の財賊を
大集事往昔の盗賊ふもまさりと中にて
今ゐ所然るやあ〻ぞさん苗亂を織〻て賊首と

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

名無る人非人共小坐さて さえ忌くし汝等が姫討
ふく本懐成達せん ハ達せぬにを妨るべ〜古語に
云ハぬや尾となりて全さうくんより玉となりて
砕けよと少くゐきバ壁へ比身ハ粉ふるとも
正路小憑りて尋ぬべ〜露ばかりも賊に用ゐ
ちやまこと立さ〜帰らぬハ目小もの見せんと云ふも
棍押小掛る難刀おつとり高連成瞞目にうけて
立さうしハ最由々〜く見えふる高連完爾

と打ふ〜ひさ〜も大膳ゐる女ゐ迚もて承て
任せぬハ引括ても思ひをちさんざりゐぐら其の
難面乞氣ある振舞こ我〜中〜に心ゐくゐをゐぬど
比ま〜小帰らぬぎと己に手元へ入身の早業心得
さうと飛去さつて下股にそくバ高連ハ錫杖小
仕込〜大刀ぬきさゐち毛成吹てもとゐる疝て
痛き目見するハ不便ゐきどもとてもうくても
心強くハ此世のいとゐ女とうせんと切ふて太刀を

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

打たゝひ火花を散して戰ひハ北剣菜ふゝぬ
姫百合の風代うけるふぜんなり乳人のおまんを
太刀ぬきもち晴姫をバ祖母君ふみづけまいゝせ
高連を目がけて切てゝ出バ高連大音に下知
して誰うめる出合へやと呼ハきバ先ふ外面ふひく
る強盗どもすハ事とぬきつれ我され
ふとこゝをべるおまんハ見るよりうちおどろき
今ハゝてをるふまで命のうだりまうりゆひく

えこゝハ主君と討させじとかるゝ代さんひゝこゝり
ひゝりに切ゝてゝ突てゝ死も巴女が男と揮ふ
忠義我ふ凝る必死の大刀先ふして電光のきゝ
ゝごとく走バーゝほどふ七八人まゝ切ゝ倒し
鬼のゝとと高連ゝ戰ふゝりへ奇せ附けじと
いやがうへふ切ゝまくゝ走バ叫ひゝゝや思ひ人
盗人ゝもハ白ゝうゝりて押合ゝ引退く
なる代ゝ必さじと追行くまゝに盗人等もおまんを

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

共小げさく見えで成ア小なり幼ふごてろに晴姫ハ
おまんどこく行さやもど生と林文のゆまんざくいさと
ゆせるうちにてこれさの両人いまぐ勝負のさてしちく
さぐひ小秘術を盡ちといくもさぐうるハまま
鳥の形ぐぐる〳〵奴身れ重ぐるを八高連小増り
ぐ〳〵已に危く見えるところ小老母ハやと声
うけ〳〵ぐう〳〵懐剣を咽ちに突〳〵苦一き
息れ下よりも制して去く惣方相引小引る多へ

嫁女とバ横山どのく急〳〵せんといっ成やくより鎗の形
難刀うちすく考アと命アと令端の老母小とうすぐ
是ハいろる故の御生害ニて小ふ〳〵ハを賊着れ心に
まくせんとハ小多りのことふおん心もこぐきさせ不ぬ
遇し頃よりうき事のこにく今に小ア時の御安緒
もさせ奉〳〵ぐ氏まく御最期をとげぬ〳〵冥途に
まーまて我ガ夫のさぼ〳〵ぐうを〳〵〳〵多ハん
さりとく小孫子れるげきもおちひやり多ハで曲も

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

なほ瀬自害ハ余りかいきみきあんしやと且うゝこと
且歎きて前後不覺かに見えらしがさみえひて
もとより心もこゝろぎもど大望はるあん躰らち抜
ゝえかに老るもの足手まとひハ有りて益なし
無くて事うけぢと出うより斯く自殺して子供
さげまゝ例もものゞゝ世小小ちゝぢそのうへ
今ハ横山との横恋慕より事おこりてゝ恐しき
双傷に及べぞもしあんかうゝ多ひておさみき

時姫や老朽しゝ躰ぢうい流かのこゝがゝきろ
瀬太刀のゆくえ成らずゆ瀬ろハ道正ゞ後四経抜
苦悩をそゝゝぬべき先かも高連どのゝいひある
どゝゝさるべきうし後ぞそとちるべきひと成
ゝゝゝハぢゝハ本懐を達せんことも如何ちゝく
薩ハんぢきぢて高連どの撰想せゝゝを禁ひに
とく考ゝゞひまいゝせて悪しゝをそゝゝひあるまで
さりちゞゝ操をゝる心根かてさみゝ事ハ思ひも

よろこびたまへど常盤御前の昔日を見たまへ
なに故か老母が命にくらべてこのことをなげく者憐れなり
まげてたまはらばこそ黄泉にいたりても道正が
てまへをばよきにたすくる所存申すべし。されど一すぢに
いなみたまはば未来にて道正に申して二世のちぎりを
断らん。現世には此母が勘当赦や。唯能く思慮して
敵は必ず遠方にのがれまじ。またひめがある今にも天道わ
生利に叶ひ引いてはなりぬ。目前に敵のかかる時と共

思ひさだめしか此事をおもひ出せる時いたらば心の
まづ第一に謀をめぐらし必ずあやまりて仕損じぬやうこころすべし
髙連どのへもこの趣をつたへ行末永くごひいきを加へ
晴姫をもつれて盛長せさせたまふべし。さいはひ武運に
思ひ置事なし。さらばなりと云すてて跡なく息を
ひきとりにけり。鳴のこゑばかりぞ世に泣倒るる
高連心に歓びて賊徒等をさし招きければ茲にのこれる手下の
族一同に鳴のこゑ共に二度情なくも手とり足とり

208
3
692

晴姫ものもとくく小脊屋めとをも見ぞ〜て急ぎる
向ふのうらより積雪ゆ〜ろぼしきゝ〜敷
乳人はおまんに体を見るよりも刀ゆ秩小立ゆさぐる
いろで主君ゆ盗賊ゆ手にるとべきゝくせゆ〜勢と
飛ゝ敷をひと當當をばかちなくも息の音とめを
おりうゝむざんとゝも愚ゆと

上之巻終

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692
ガラス使用

208
3
692

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用

国立国会図書館　復讎十三七月 3巻 208-692

ガラス使用